
天然彼女と女苦手彼氏

棟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然彼女と女苦手彼氏

【Nコード】

N5343A

【作者名】

棟

【あらすじ】

天然彼女と女が苦手な彼氏の話好きになったり興味なかったり！
？

1話：【野咲花】編

『ぶ~~~~!!残念でした~~~~!答えは猫です』

ケラケラ笑いながら喋っているのは、野咲 花（16）高校1年生。
（ちなみに問題は、追っても追っても逃げて行く物はな〜んだ）
『そんなのキミン家だけだよ』

呆れ顔の友人、伊藤 ケイ（16）同じく高校1年生。

『そんなことないよ〜!あたしこの前ノラ猫に近付いたら逃げられたよ〜!他にも近所の飼い猫にも逃げられたし〜』

『ごめん。さっきの訂正。それキミだけだよ』

『ヒドイ!でもあたしの愛はいつも一方通行!どんなに愛をおくっても受け取ってはくれない』

入り込んでいる。

『なにが愛よ。動物にしかおくれたことないくせに』

『ウツ!いい、いいじゃんベツに』

野咲花は今まで人間の に惚れたことがない。

『アンタ顔だけなら男から人気あるのに!』 そう顔だけは可愛い。顔だけは。

『でも、言動に問題あり。服装も気を使うことなんてないし。化粧なんてしたことない。今時の女子高生が』

『いいじゃん!それにホラッ!スカートは短いヨ!今時の女子高生って感じじゃん』

フフンと勝ち誇ったように言う。

『ああ私がしてあげたやつね』

『ありがとうケイちゃん!』

バツと抱きつく花。

『ちよいちよい話がそれてる』

サツと離れるケイ。

『ふぎや!』

『一回ぐらい付き合ってみたらいいのに』
『めんどくさいし…。男なんて皆一緒に見えるし…。興味ないし』
『あゝあ、アンタ天罰くらうね』
『えっ？なんで！？』
オロオロする花。
『ベツに…。あつ』
ゴツン！
スゴい音で花が電柱に頭から激突した。
『あっちゃゝホントに天罰？』
空を見上げるケイ。

ゝ学校ゝ

『アハハハハ！それで電柱に激突したんだ！ウケるゝ』
コレは友人の岡田。
『ホント天罰だねアハハハハ！』
同じく友人の相葉。
『痛かったんだから！』
『でもアンタ本当に好きな人いないの？』
問掛ける岡田。
『うん！あつ１人いるかな』
『ええっ』
『誰？誰？』
興味津々の岡田と相葉だが。
『正太郎』
『えー誰それ？』
『ってか好きな人いるじゃん！』
さらに盛り上がる岡田&相葉。
『…それアンタん家の猫じゃん。しかも１人じゃなくて１匹だし』

すかさずケイがつっこむ。

『……………』

落胆する岡田相葉。

『エヘヘ』

つという毎日をすごしてる野咲花と一同。説明通り、男に全く興味が
ない花だったが、朝電柱に頭を激突したせいかこの後、人生で初
めて人間の　を好きになってしまう。

く放課後く

『ケイちゃん帰ろ』

『私今日は部活あるから』

ケイは軽音楽部に入っていて、ギターを担当している。週2で部活
があり今日はある日なのだ。

『チエツ。じゃあ岡ちゃんと相葉でいいから帰ろ』

『なによ、でいいからって！』

『しかも、じゃあって…！』

不服そうな岡田と相葉。

『それに私たちは合コンがありますのでくホホホホ』
高らかに笑う岡田。

『じゃあ〜ね』

ヒラヒラと手を振り去っていく。

一人ぼっちになった花は渋々と帰ることにした。

『あ〜あつまないなあ〜』

トボトボ帰る花。

ガッン！

『フゴッ』

また電柱に激突し、さらに奇声を発した。

『イタタタ…』

『大丈夫ですか？』

一人の男性が心配そうに後ろから声をかけた。

『あつ大丈夫です…。』

振り替えたら。見たことのある制服。あつ、うちの高校の人じゃん。でも見たことないなあ。誰だろ？まあいいや。

『じゃあこれで…』

立ち去る男性。もちろん男に興味のない花なのでこんなマンガみたいな展開恋愛は始まらないのであった…。

1話：【森大地】編

『よっ大地！』

『…なんだヨシタカか』

『なんだって…。それにしても相変わらず暗いな。お前』

彼は森大地（16）と友人の岩崎ヨシタカ（16）どちらも高一。

『おっ前見てみろよ』

ヨシタカがそう言ったので前を見ると女生徒が2人歩いていた。

『隣のクラスの伊藤ケイと野咲花だぜ。どっちも可愛いんだよね。』

伊藤ケイはクール系だな。野咲花は可愛い系だけどイロイロ問題ありだ…。

聞いてもいないのに淡々と話を続けるヨシタカ。

『まあお前に話しても無駄だな。』

じゃあ言うな。

『なんせ女が苦手なんだもんね』

ハハハハと笑いながら言った。

ゴッソ！

…あつ電柱にぶつかってる。

『なっ！野咲花はアレだからな！』

また笑いながら言った。

『ふっん』

（学校）

『オイ！大地！隣のクラス行こうぜ』

学校について早々にヨシタカが面倒なことを言った。

『…やだよ面倒くさい。意味ないし』

『馬鹿！なに言ってるんだよ！お前さっき見ただろ』

『？』

『野咲花だよ！電柱に激突した』

『え？見たけど……』

ヨシタ力がなにを言いたかったのかよくわからなかった。

『鈍感だなお前は！話すきっかけが出来ただろ！今がチャンスなんだよ』

『お前一人で行けばいいじゃん……』

『アホか！あつちは2人だぞ！それならこっちも2人で行くべきだろ！』

『…違う奴誘えよ』

『残念ながら俺の知り合いの中でキミが一番ルックスがいいんだ』
残念の意味がわからん。

『それで？』

『だからついてこい！』

答えになっていないが無理矢理引っ張られて、隣のB組に行った。

〔B組前〕

『よゝしついたぞ』

まあ隣だから直ぐついた。

『見る大地よ！窓際にいるぞ！…ぬっ』

一人で騒いでいる。忙しい奴だ。

『大変です！隊長！』

『誰？』

『敵は4人います！残念ですが太刀打ちできません』

『………………。』

『うゝんあれは岡田香奈美と相葉夕夏だな。アレもなかなかなんだがな…………アレッ？大地君オーイ』

一足先に教室へ帰ることにした。ヨシタ力を置いて。

『お前なゝ友を置いて行くなよー』

ヨシタ力が帰ってきた。

『それにしても本当にお前女に興味ないんだな。あつ興味がないん

じゃなくて苦手なんだな！ハハハハッ残念残念』

森大地は女性が大の苦手。顔は最高なのに今まで彼女はいたことがない。それどころか女友達もないし、ともに女性と話すことができないのである。しかし、女生徒の中では人気ナンバーワンである。

～放課後～

『大地』今日はつきあえよ』

今日は合コンがあると昨日からうるさいぐらい言っていた。

『って来るわけないよな』

『わかってるなら言うなよ。じゃあな』

学校でヨシタカと別れ、帰り道についた。

まだ学校前だがこの道は人通りが少ない。今現在この道を通っているのは俺と前を一人歩いている女生徒だけだ。あつ

ガッン！

前を歩いていた女生徒が電柱に激突した。なんか朝見たような。つてか一日で電柱に激突する場面を二回も見ると貴重だな。

それにしてもどうしよう。なんか言った方がいいのかな？さすがに素通りは出来ないし…。俺は緊張しながら声をかけた。

『大丈夫ですか？』

こちらを振り向いた。この人が野咲花さんか…。つてかやつぱり話しかけるんじゃないか。早くこの場から立ち去りたい。

『あつ大丈夫です…。』

よしっもういいだろう早く行こう。

『じゃあこれで…。』

そう言っただけで早々に立ち去った。

2話：変化なし

『ハナ〜!?!』

登校中、ケイが花に近づくが元氣のない花。

『どうしたの? 珍しく元氣ないじゃん!』 ぼーとしてる花

『オーイ生きてますか? ってあんた傷が昨日に比べて一つ多いんですけど』

『……………はっ!? あっケイちゃん!? えっ何? キス? INですけど??.』

『…何言ってるの?』

『…さあ?』

いつもチンプンカンプンな花。 軽い沈黙の時間が流れる。

『おはよ〜』

後ろから岡田と相葉が寄ってくる。

『あつ岡葉ちゃんオハヨ〜』

『おいっ! 私と相葉を混ぜるなよ』

『えーじゃあ相田ちゃん?』

『いやいや変わんないから!』

朝から花と岡田相葉のコントを見せられるケイ。

若干、花が元氣無いのを気にしながらもそういう日もあるだろうと余り心にとめる事はしなかった。

後ろを歩く大地とヨシタカ

『なあなあ聞いてくれよ〜昨日合コンしたんだわ〜』

まあ前々から言ってたし

『そしたら、どこでどう間違ったか岡田と相葉があっち側にいたんだよ! そしたらあいつら俺の顔見ると明かに、え〜って顔するわけ』
『……………』

『あれ? 大地君今笑いませんでした? まっそれで、俺も対抗して、』

えゝって顔するわけ、そしたら岩崎のくせに何調子こいてんの的な流れになつてさ………」

ヨシタ力はその後教室につくまでずっとその話を続けていた。

『〜でまー結局、2人とも仲良くなつただけだな』

二カッと笑いなぜか誇らしげで話を終えた。

『よかつたな。じゃあこれからは俺に付きまとわず、その人達と仲良くしていけよ。』

軽くあしらう。ただ他に言うこともなかったし。

『いやいや残念ながらそうはいかないんだな〜。あの2人がさお前とも仲良くなりたいつてさ。まあ女からしたらお前は憧れの的なのに、なかなか仲良くなれないからな〜。そこで親友のオレを頼つてだな〜あれ？オレって利用されてるだけ！？』
相変わらずひとりで騒ぐヨシタ力だった。

『いや俺はいいよ。…別に話すことないし………つてか話せないし……』

モゴモゴと声を小さくして言う大地

別に苦手だから興味が無いわけじゃないけど今すぐ彼女がほしいとか女友達がほしいとかは思わない。年を重ねればいつか自然に話せるようになるだろうし。でも今は女性と話すのは苦手だし、苦手なことにチャレンジする意味ないし。

一方花達の教室では。

『ちよつと聞いて聞いて！』

元気よく喋りだしたのは岡田。

『昨日合コンだったんだけど〜どこでどう間違つたか隣のクラスの

岩崎ヨシタカが来てたわけ！』

『そうそう、もう、えーって感じだったんだけどあいつ必死だったし、よく考えたらあいつあの森大地君とスッゴい仲良いんだよね』
相葉と岡田が交互に話す

『で、まずあいつと仲良くして利用して森君と仲良くなるって作戦！そしたら私らは森君レースでトップを走れるの！』

ニコニコ笑いながら話す岡田

『えっ何その森君レースって…？』

大体は予想つくが一応聞いてみるケイ

待ってましたと言わんばかりに答える相葉

『もーだめだなケイは。いい？森君レースってのはあの女の子と全然話さない超カッコイい森君を誰が射止めるかって話。でもまず話すってのが第一関門なわけ！そこで岩崎を使って…』

フフンと得意げに話す。まあそんなもんだろうなと。

しょうもない話でも聞いてあげるのが友達なんだとひとり納得するケイだった。

『んで私らが今一歩進んだ感じ？あんたらはまだスタートラインだね』

『まだ話てないんじゃないの？ってか勝手にレースに参加させないでよ。私興味ないし』

冷えきってるケイ。ケイらしい事だけど。

『えゝつまんない！あつ花は？？森君！知ってるでしょ！？』

『…誰？猫？』

『……………』

『……………』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5343a/>

天然彼女と女苦手彼氏

2010年10月10日13時38分発行